

深沢七郎「風流夢譚」再読

——「鬼畜米英」と三島由紀夫

野 中 潤

一、はじめに

深沢七郎の「風流夢譚」は、一九六〇（昭和35）年十二月号の『中央公論』に掲載された⁽¹⁾短編小説である。題名に「夢譚」（＝ゆめものがたり）とある通り、「私」が見た夢を描いたという体裁になっているのだが、天皇家を侮辱していると考えられる表現があったために右翼団体の逆鱗に触れ、発表後まもなく中央公論社打倒運動を引き起こしてしまう。中央公論社は事態を沈静化するために、「風流夢譚」を掲載した翌号にあたる一九六一（昭和36）年新年号に謝罪広告を掲載するなどの対応をとるのだが、元右翼団体の少年（当時十七歳）が中央公論社の嶋中社長宅に押し入り、不在の嶋中社長のかわりに社長夫人を襲って重傷を負わせた上に、家政婦の丸山加禰^{かね}さんを刺殺してしまうという事件が起きる。一連の騒ぎによって身辺に危険が迫っていることを感じた深沢七郎は、発表直後から五年近くにわたって隠遁生活を送らざるを

得なかつた。こうした事件⁽²⁾のために「風流夢譚」は、深沢七郎の短編集などに収録されて一般向けに刊行されないまま今日に至り、小説そのものが読まれることはほとんどない。「嶋中事件」とも呼ばれるテロを誘発した原因となったのは、たとえば次のような表現だった。

その横で皇太子殿下と美智子妃殿下が仰向けに寝かされていて、いま、殺られるところなのである。私が驚いたのは今、首を切ろうとしているそのヒトの振り上げているマサキリは、以前私が薪割りに使っていた見覚えのあるマサキリなのである。私はマサカリは使ったことはなく、マサカリよりハバのせまいマサキリを使っていたので、あれは見覚えのあるマサキリなのだ。（困るなア、俺のマサキリで首など切つてはキタナクなつて）と、私は思っているが、とめようともしないのだ。そうしてマサキリはさーつと振り下ろされて、皇太子殿下の首はステンコロコロと音がして、ズーッと向うまで転がつていった。（あのマサキリは、もう、俺は使

わなないことにしよう、首など切ってしまったて、キタナクテ、捨てるのも勿体ないから、誰かにやってしまおう)と思ひながら私は眺めていた。私を変だと思ふのは、首というものは骨と皮と肉と毛で出来ているのに、ステンコロコロと金属性の音がして転がるのを私は変だとも思わないで眺めているのはどうしたことだろう。それに、(困るく、俺のマサキリを使つては)と思つているのに、マサキリはまた振り上げられて、こんどは美智子妃殿下の首がステンコロコロカラカラと金属性の音がして転がっていった。首は人ゴミの中へ転がって行つて見えなくなつてしまつて、あとには首のない金欄の御守殿模様の着物を着た胴体が行儀よく寝ころんでいるのだ。

安保闘争で社会が騒然とした年の暮れであり、「革命」がそれ相応のリアリティーを持つて想像され得た時代状況のさなかである。きわめて特異な立場にいるとは言え、民主主義を標榜する国家の中に生きている人間を、このような形で描写することは、たとえ「ゆめものがたり」として提示されているのだとしても、きわめて挑発的なものであったことは確かだろう。実際に名誉毀損に関する法的な議論をはじめ、『中央公論』編集部や著者深沢七郎に対する批判など、多くの論議を巻き起こし、抗議集会等も開かれた。ただし問題の核心は、小説表現に対する批判がテロを誘発し、事件の発端となつた「風流夢譚」が現在にいたるまで封印されたままになつてゐることである。結果的に、小説表現そのものを議論す

ることすら困難になつてしまつてゐる。もちろん表現の自由には負うべき責任というものもあるはずだが、だからこそ「風流夢譚」には読まれる権利があり、論じられる権利もあるはずなのだ。

安保闘争で騒然としていた時代から半世紀近くが過ぎ去り、天皇制打倒や革命が政治思想上の現実的な課題としてリアリティーを喪失してしまつてゐるように見える今日において、「風流夢譚」はいったいどのような姿で立ち現れてくるのだろうか。できるだけ小説表現に寄り添いながら、改めて考えてみることにする。

二、「左慾^{サガク}」という表現

現代日本において、特に若い世代の日本人にとつては、右翼や左翼という言葉はもはやほとんど死語と化してゐるのではないだろうか。もちろんプチ右翼とかネット右翼のようなものはあるし、格差社会と言われる時代の中で既成左翼としての日本共産党に入党する若者も少なくない⁽³⁾という。しかし政治思想のあり方や政治的な行動様式が多様化し、かつてのような二項対立が成立しがたくなつてゐることも事実である。しかも、右翼や左翼の思想的特質が自明のものではなくなつてゐる場所から眺めてみると、テロによつて深沢七郎の小説が圧殺された一九六〇年代初頭においてもまた、イデオロギー的裁断が容易ではないことが見えてくる。たとえば「風流夢譚」を書いた深沢七郎は、「左翼」なのだろうか、「右翼」なのだろうか。

「右翼」の逆鱗に触れたという事実から考えれば、「左翼」であるに違いないと思われるのだが、事態はそれほど単純ではない。たとえば、次のような語り口は「右翼」のものなのか、それとも「左翼」のものなのか。

「革命ですか、左慾^{サヨク}の人だちの？」

と隣りの人に聞くと、

「革命じゃないよ、政府を倒して、もつとよい日本を作らなきゃダメだよ」

と言うのである。日本という言葉が私は嫌いで、一寸、癪にさわったので、

「いやだよ、ニホンなんて国は」

と言った。

「まあキミそう怒るなよ、まあ、仮りに、そう呼ぶだけだよ」と言って、その人が私の肩をポンと叩いた。この時私は、並んでいる人達はみんな労働者の様な人達ばかりなのに気がついた。

「革命ですか、左慾^{サヨク}の人だちの？」という「私」の発言において、「左慾」という文字が使われていることに、「左翼」に対する否定的なニヒアンスを読み取ることは容易だろう。だとすればこの発言は、「左翼」と対立する「右翼」の側に立つものであることになる。またそのあと「私」は、「いやだよ、ニホンなんて国は」とも言っている。しかもここで「私」が問題にしているのは、どうやら日本という国家

そのものではないらしい。「私」が嫌いなのは、「日本という言葉なのであり、「ニホンなんていう国」なのである。これを「大日本帝国」が「日本」になってしまったことに対する拒絶反応だと見なせば、「ダイニッポンテイク」が「ニホン」になった敗戦後の現実に対して「私」が批判的な場所にいることを示唆していることになる。ここに国粋主義的な感性を指摘できるとすれば、「私」が「右翼」的な発想の持ち主だと見なすことも許されるはずだ。

ただし「左慾^{サヨク}」や「ニホン」は作中人物による発言を直接話法によつて示したものであるし、「日本」という言葉が私は嫌い」というのも、小説の中に仮構された「私」の言説であり、これらをそのまま小説全体の政治的立場を示したものと考えるのは早計である。「左慾」や「ニホン」に関する表現の意味を考えるためには、いくつかの異なる位相を想定しなければならぬだろう。あくまでも便宜的なものになるが、それはおおむね次の五つの位相に分けられる。

まず第一に、作中の「私」が夢を見ているときの意識に即した位相。第二に、作中の「私」が夢を見ているときの自分を覚醒後の意識の中で再構成しようとしたときの位相。第三に、それを手記として書き記そうとしたときの位相。第四に、夢を見た作中の「私」を仮構した「深沢七郎」なる作者が、「風流夢譚」という短編小説を読者に提示しようとしたときの位相である。そしてもちろん第五に、「風流夢譚」という短編小説を発表したことで生命の危険を感じて隠遁生活を送らざるを得なかった実在の深沢七郎という位相を、第四の位相とは区別して想定することもできる。

直接話法によって示されている作中人物の発話であるから、基本的には実在の深沢七郎という第一の位相から最も遠い、夢を見ているときの「私」の意識という第一の位相から考えなければならぬはずだ。しかし「左翼」と表記すべき言葉が「左慾」と表記されているために、いったいどの位相における意識の反映なのかを決定することが困難である。なぜならば作中人物のレベルに即した第一の位相において「サヨク」という発話はたんなる音のつらなりに過ぎないはずであり、そこに「左慾」という特殊な表記をあてはめたのは別の位相にいる「私」ないしは「作者」でなければならぬはずだからだ。「サヨク」という音のつらなりに「左翼」ではなく「左慾」という表記を適用したのは、いったいどの位相においてなのだろうか。

一般的に日本語の音韻体系の中で発話された漢語を了解する場合、まずは聞き手の中に聴覚映像と呼ばれるものが生み出され、そのイントネーションや文脈をおもな手がかりとしながらも、何らかの形で漢字表記との結びつきが意識されるはずである。たとえばテレビから「オシヨクジケンをめぐってキョウギがつづけられました」という音声がかえってきたとき、「お食事券をめぐって競技が続けられました」と聞き取ってしまうことはまずない。かりにいったん「お食事券」と理解してしまったとしても、報道番組のアナウンサーの声であることを手がかりとしながら聞き手の意識の中で修正作業が行われ、「汚職事件をめぐって協議が続けられました」という意味であることが了解されるはずである。あるいはそのあとと緊急経済対策としての補正予算の話題が続いたとすれば、

「もしかするとお食事券を国民に配ることによって景気浮揚をはかるべきか否かについての協議かも知れない」などと、発話された音声言語の了解のしかたをさらに修正していくことになるだろう。ここで留意しておきたいのは、いずれの局面でも、音声言語を了解しようとする人間の意識の中に、漢字表記の像が何らかの形で影響を与えているのではないかということである。たとえば電車の中で「ツギワカンナイ」というアナウンスを聞いて、「次、わかんない」ではなく「次は関内」であると理解できるのは、車掌が次の乗車駅を知らないはずはないし、知らないことをアナウンスするはずがないという了解が背景にあるからだというだけではなく、漢字表記のイメージをともなつた「次」は「関内」という分節化された単語の像が想起されるからであるに違いない。また「セイコウガクイン」つて、どんなかんじ？」と訊かれて、「松田聖子のセイにヒカリ」と答えた人は「漢字」という表記をどこかで意識したはずであり、「ごじんまり」として、アットホームな雰囲気と答えた人は「感じ」という表記を意識したことになるはずなのだ。

そんなふうを考えていくと、日本語による〈話す―聞く〉関係に身を置くものは、漢字表記の像をともなつた形で言語を了解していると考えることが出来る。母語としての日本語を身につけた人間が〈話す―聞く〉関係におかれているときに、「お食事券」と「汚職事件」とか「歯医者」と「敗者」、あるいは「時価千円」と「耳下腺炎」が同じ音であることを意識することがないのは、文脈やイントネーションによって意味の了解が成立していることを示している

ともに、聴覚映像が漢字表記と結びつけられていることの証左でもある。したがって夢の中で自分の発話を意識した「風流無譚」の「私」が、「左翼」ではなくて「左慾」と発話したのだという意識を持つていて、それが表現に反映されている可能性は否定できない。つまり、「左慾」という表記が第一の位相にいる作中人物としての「私」の意識を反映したものである可能性を排除できず、結果的にどの位相で「サヨク」という音のつらなりに「左慾」という表記が適用されたのかを確定することができないというわけだ。こうしたことは、昭憲皇太后に対する「なにをこく、この糞ツラレ婆ア、てめえだちはヒトの稼いだぜニで栄養栄華をして」のような発言においても同様である。「栄養栄華」という表記が「栄耀栄華」の誤植でないとすれば、明治天皇の皇后であり、「昭和憲法（＝日本国憲法）」を想起させる名前をもつ「昭憲皇太后」の飽食ぶりを作者とも作中人物とも断定できない場所から揶揄していることになり、作中人物の言動と距離を取りながらそれを相対化する語り手や作者の視点を析出してない「風流夢譚」という小説の特質を示していることになるのだ。そもそも「夢」というものが、見ている「私」を十分に相対化できないままに、半ば夢の中にいる「作中人物」「私」の「現実」によって構成されるものであることを考えれば、一人称による「ゆめものがたり」として書かれた「風流夢譚」に同じような特質が見いだせるのは当然のことであるとも言える。ただし、「風流夢譚」が政治思想上の「誤読」を誘発し、テロ事件を引き起こしてしまった要因の一つが、こうした特質の中にあつたのではないかと

いうことも指摘しておかなければならぬだろう。

三、「鬼畜米英」の影

作中人物と語り手、あるいは作者との関係があいまいなまま書き進められている「風流夢譚」という小説が、政治的あるいは思想的にどういふスタンスを取っていると考えられるか、イデオロギー的な判断を安易に行うことなく、可能な限り表現に即して考えてみよう。たとえば、次のような表現がある。

皇太子はタキシードを着ていたが、天皇の首なし胴体は背広で、皇后はブラウスとスカートで、スカートのハジには英国製と商標マークがついているが、私は変だとも思わないで眺めていた。仕立上ったスカートにそんな商標マークがついている筈はないのに、変だとも思わないで私は、(天皇の背広も英国製だ)と思つて眺めているのだ。

天皇と皇后の処刑シーンの一部である。このあと登場する「昭憲皇太后」の「ツーピースのスカートのハジ」にも「英国製という商標マーク」がついていることになっている。「ハジ」という表記は直接話法で示されているわけではないが、作中人物としての「私」が夢を見ている最中の意識を反映させたものであるのか、あるいはそれを反芻する覚醒後の「私」の意識をなぞったものであるのか、はた

また語り手や作者によってあえて選択されたものであるのが不分明であることは、「左慾」の場合と基本的に変わらない。一般的な表記である「端」や「はじ」ではなくあえてカタカナで表記することが選択されていることで、「ハジ」という言葉が前景化され、読み手の意識に「端―ハジ―恥」という連合関係が浮上しやすくなっている。こうした連合関係が喚起するのは、仕立て上がったスカートであるはずなのに商標マークがついているということに対する「恥」の意識と、日本の象徴であるはずの天皇と皇后が「英国製」というレッテルを身にまとっているという「恥」の意識である。もちろんこの「恥」の意識によって否定的な眼差しを受けなければならぬのは、天皇個人であるというよりもむしろ、日本国憲法の規定によって天皇が象徴していることになっている。「日本および日本国民統合」である。「日本という言葉」が嫌いだというのが、「大日本帝国」という呼称に対する愛着に由来するものとすれば、「日本および日本国民統合」が「鬼畜米英」と呼ばれた国の商標マークを付けていることに対して「私」が「恥」の意識を持つことは十分にあり得る。六〇年安保を引き起こした要因のひとつが敗戦後に抑圧されてきた反米の情念だつたという見方を受け入れるなら、「風流夢譚」が描き出している「ゆめものがたり」は、きわめて先鋭に一九六〇年の「日本および日本国民統合」を映し出していると言えるのである。

「風流夢譚」には、他にもかつての「鬼畜米英」のイメージが影を落としている場面をいくつも指摘できる。

たとえば、渋谷の大盛堂書店の前にあるバス停で八重洲口行きのバスを待っている「私」が、「銀座」で「火焰放射器」を用いて抵抗しているという「敵」の噂を聞いた中年の職業婦人が「火焰放射器なんてヘッチャラよ」というセリフを口にするのを耳にする場面がある。明治維新を機にヨーロッパを模して作られた「銀座」は敗戦後にGHQの将兵たちが闊歩した街であり、「敵」が使っている「火焰放射器」は沖繩戦においてアメリカ兵が多くて民間人を殺傷した兵器である。

そのあと「青山車庫の方」から「キサス・キサス」を演奏しながら「軍楽隊」がやって来る。演奏している「キサス・キサス」のいう曲は、アメリカ人歌手のナット・キング・コールが歌ってヒットした *Quizas, quizas* を水谷良重やアイ・ジョージなどの日本人歌手がカバーして広く知られるようになった曲である。一九六〇年当時、渋谷駅からほど近い場所にはワシントン・ハイツ（現・代々木公園）があったことはよく知られているが、軍楽隊が来た方向に青山通りをそのまま進めば皇居に突き当たり、その手前にはジプシーアーン・ハイツのような米軍関連施設もある。「敵」の側から「こっちは帰順した」とされている軍楽隊が、自衛隊のものであるのか、駐留米軍のものであるのかは判然としないが、この場面にもアメリカのイメージが影を落としていることは確かだろう。

また、わかりやすいところでは、冒頭部分に登場する「時計」を指摘することができる。

あの晩の夢判断をするには、私の持つている腕時計と私の妙な因果関係を分析しなければならぬだろう。私の腕時計は腕に巻いていると時計は正確にうごくが、腕からはずすと止まつてしまうのだ。私は毎晩寝る時は腕からはずして枕許に置くので、針は止つて、朝起きて腕につけると針はうごくのだ。だから、

「この腕時計は、俺が寝ると俺と一緒に寝てしまうよ」

と私は言つて、なんとなく愛着を感じていたのだつた。これは腕時計が故障しているので時計の役目をしないことになるのだが、それでも私は不便は感じなかつた。私と同居しているミツヒトという甥は機械類が好きで、時計も高級なウエストミンスターの大形置時計を置いてあるからだつた。

弟から修繕をすすめられた「私」は、腕からはずすと止まつてしまふ時計を弟の知り合ひの時計屋に持つていくのだが、「凄腕時計ですよ」とお世辞を言われて金張りのバンドを売りつけられてしまふ。仕方がないのでデパートの時計部へ持つていくと「タイヘンな、インチキ時計ですねえ」と哀れまれてしまふ。「スイス製のマーク」がついていると言え、いかにも怪しげなこの腕時計は、もともとは友人が帰国する急遽帰国することになったアメリカ婦人から「捨て値」の五千円で買つてきたものである。その時計を今度は友人が三千円でいいから買つてくれと言つて「私」に売りつけたのだという。どう見ても胡散臭い腕時計である。

この腕時計がアメリカのイメージと結びつけられているとすれば、「ミツヒト」という天皇家を連想させる名前の甥が持ち込んだらしい「ウエストミンスターの大型置時計」は、もちろんイギリスのイメージと結びつけられていることになる。

アメリカ婦人のインチキ臭い置き土産との「妙な因果関係」を分析しようとする「私」の語り口は、アメリカと私(日本人)との妙な因果関係について語つていようにも思えて、いかにも思わぜぶりである。「純金」の部品で作られているはずが実は「トタンのメッキみたいなもの」で、後から買ひ足した千五百円のバンドだけがかるうじて「金張り」であるというあたりに、「二ホン」と呼ばれている国が拝金主義に毒されたインチキ臭いものになつていふことの戯画を見て取ることができるかもしれない。さらに言えば、そのような国の民衆が、「英国製」という商標マークをつけた「日本および日本国民統合の象徴」としての天皇の一家を処刑してしまふということの中にも、「妙な因果関係」を見て取ることができらう。

四、「風流夢譚」と「英霊の聲」

三島由紀夫は、深沢七郎が「檜山節考」(『中央公論』一九五六年十一月)で中央公論新人賞を受賞したときに選考委員を務めていた三人の作家のうちの一入である。その際に三島由紀夫が「檜山節考」を絶賛したことは、よく知られている。また、増村保造監督の映画「からつ風野郎」(一九六〇年・大映)の主題歌は、作詞・

三島由紀夫／作曲・深沢七郎というコンビで作られている。歌ったのは、主演した三島由紀夫である。さらに、「風流夢譚」が『中央公論』に発表されようとしたとき、編集部の問い合わせに対して三島由紀夫が掲載しても差し支えない旨の回答をしたとも言われている。思想的には「右翼」とされることが多い三島由紀夫が、右翼団体から激しい抗議を受けるような小説を書いた深沢七郎に対して好意的な関係を保っていたのは、一見わかりにくく思えるかもしれないが、二人の立ち位置がきわめて近接していることは、「風流夢譚」の六年後に三島由紀夫が書いた「英霊の聲」(『文芸』一九六六年一月)を見るだけでも明らかである。

三島由紀夫の「英霊の聲」は、降霊会で世にも稀なる出来事を目撃した「私」の手記として書かれた小説である。霊媒の川崎君に憑依するのは、二・二六事件で決起した将兵たちの霊と、「特別攻撃隊の勇士の英霊」だった。そして「お国のため」に戦争で命を落とした「英霊」は、霊媒の川崎君の口を借り、「強い怒り」を抑えつつも、敗戦後に「人間宣言」をした天皇を執拗に非難し続ける。

されど、ただ一つ、ただ一つ、
いかなる強制、いかなる弾圧、
いかなる死の脅迫ありとも、

陛下は人間なりと仰せらるべからざりし。
世のそしり、人の侮りを受けつつ、

ただ陛下御一人、神として御身を保たせ玉い、

それを架空、そをいつわりとはゆめ宣わず、
(たといみ心の裡深く、さなりと思すとも)

(中略)

などですめろぎは人間となりたまいし。

などですめろぎは人間となりたまいし。

などですめろぎは人間となりたまいし」

.....

英霊たちは、自分たちが命を捧げた現人神が、昭和二十一年に「人間宣言」をしたことに対する強い怒りを抑えつつ、「などですめろぎは人間となりたまいし」という怨みの言葉を繰り返す。現人神に殉じた者にとつて、「人間宣言」は重大な背信行為に他ならないからだ。同じような「ゆめものがたり」ではあるが、戯画化された天皇を、作者自身であると混同しかねない生者の「私」の夢の中に登場させた「風流夢譚」に対し、降霊会に立ち会う「私」を目撃者として作中に登場させた上で、霊媒を通して仮構された死者の眼差しによつて天皇を告発するという「英霊の聲」の仕掛けは、隙がなく、巧妙である。英霊たちは天皇制を護持するためにこそ、「人間天皇」を告発しているのだ。こうした告発に先立つて英霊たちは、霊媒の川崎君を通じて物質文明に毒された敗戦後の日本および日本人をも痛烈に告発している。

「.....今、四海必ずしも波穏やかならねど、

日本のやまとの国は
鼓腹撃壤の世をば現じ

御仁徳の下、平和は世にみちみち

人ら奉平のゆるき微笑みに顔見交わし

利害は錯綜し、敵味方も相結び、

外国の金銭は人らを走らせ

(中略)

なべてに痴呆の笑いは浸潤し

魂の死は行人の額に透かし見られ、

よろこびも悲しみも須臾にして去り

清純は商われ、浮蕩は衰え、

ただ金よ金よと思いめぐらせば

人の値打は金より卑しくなりゆき、

(中略)

車は繁殖し、愚かしき速度は魂を寸断し、

大ビルは建てども大義は崩壊し

その窓々は欲求不満の蛍光燈に輝き渡り、

朝な朝な昇る日はスモッグに曇り

感情は鈍磨し、鋭角は摩滅し、

烈しきもの、雄々しき魂は地を払う。

血潮はことごとく汚れて平和に激み

ほとばしる清き血潮は涸れ果てぬ。

天翔けるものは翼を折られ

不朽の栄光をば白蟻どもは嘲笑う。

かかる日に、

なぞてすめるぎは人間となりたまいし」

.....

「白蟻どもは嘲笑う」というのはおそらく、「外国の金銭」によつて狂奔する日本人を尻目に、土台を食い尽くそうとしている存在としての白人の姿を表現しようとしたものだろう。「英霊の聲」によつて告発されている「天皇」は、「鬼畜米英」という立ち位置から身をひるがえし、アメリカ的な価値観に身をゆだねて英霊たちを裏切った敗戦後の日本人の「象徴」なのだ。つまり、「風流夢譚」という小説の中で処刑された天皇と、「英霊の聲」という小説の中で告発されている天皇は、きわめて近接した感性によつて形象化されているのである。

「英霊の聲」の最後で口寄せを終えて力尽きて倒れてしまったとき、「その死顔が、川崎君の顔ではない、何者とも知れぬと云おうか、何者かのあいまいな顔に変容している」のを見てその場に居合わせた人々が慄然とするのは、おそらくそこに自分たち敗戦後の日本人の没個性的な顔を見いだしたからである。言わばそこには、「日本および日本国民統合の象徴」としての「何者とも知れぬ、何者かのあいまいな顔」があったのだ。降霊会に居合わせた人々が霊媒の川崎君を通じて英霊が憑依した川崎君とともに自分たち自身を告発し、自分たち自身を処刑したことに気づいて慄然とした

のだと考えてもよい。

昭憲皇太后の頭をなぐりつけようとしたときに「丸いハゲ」を見て思わず飛びのいてしまった「風流夢譚」の「私」は、「ハゲを見ると怖ろしくなるからで、これは私の頭がハゲているのでこれは自分の弱点を他人の中に見つけて怖ろしがるのである」と釈明している。インチキや弱点を抱えた存在としての共通点を、昭憲皇太后と自分との間に見いだしていることを示唆する場面だと言つてよいだろう。また、アメリカ人の婦人が置き土産にしたインチキくさい時計を愛用している「私」が、英国製の背広を着て処刑された天皇の姿を目撃した後、「ヒトの歌」を辞世の句に盗用して読み上げながら夢の中で自分の頭をピストルで打ち抜いて自害しているのは、「妙な因果関係」の中に置かれている自分を、天皇や皇太子と同じように「処刑」するためだったとも考えられる。夢の中で革命によつて打ち倒されようとしている「悪魔の日本」とは、「日本および日本国民統合の象徴」としての「天皇」であり、そうだとすれば日本人である「私」も「処刑」をまぬかれないはずだからだ。

昭和天皇および天皇制に対するこのような屈折した意識は、明瞭な形で言説化され、頭在化されることなく、敗戦後の日本人の歩みにさまざまな影を落としていたと考えられる。天皇に対するねじれた執着を平明な語り口で言説化するのには容易なことではなく、深沢七郎や三島由紀夫のように、夢や口寄せのような文学的な仕掛けをほどこすことによつてようやく言説化することが可能だった。しかも「嶋中事件」が起きたことによつて、天皇に対するコ

ンプレックスをを頭在化させまいとする抑圧的な力はさらに強まっていた。そのような状況の中で、深沢七郎の「風流夢譚」や三島由紀夫の「英霊の聲」が出現せざるを得なかった背景を、明瞭な形で広範な読者の前に示した例外的な存在として、『私の天皇観』（辺境社、一九八一年八月）や『砕かれた神―ある復員兵の手記』（朝日選書、一九八三年八月）を書いた渡辺清をあげることができ。

三島由紀夫と同年の一九二五（大正14）年の生まれで、志願して少年兵として海軍に入り、戦艦武蔵乗組員の生き残りとして復員した渡辺清は、「きつと死をもってその責任を償われるだろう」と予想していた天皇が、敗戦後におこなった自分たちに対する背信行為に衝撃を受ける。今となつてはあまりにも有名な写真。マッカーサーと昭和天皇の会見の様を伝える写真を、一九四五（昭和20）年九月二十八日付の新聞で見たのである。開襟シャツを着てパイプをくわえ、くつろいだ様子でカメラの前に立つ占領軍最高司令官のマッカーサーと、モーニング姿の緊張した面持ちで直立不動の姿勢をとっている昭和天皇。敗戦の責任をとって自決するどころか、敵の司令官の軍門に下り、「厚顔無恥」な記念写真に収まっている「大元帥」の姿を見た渡辺清は、しばらくは体のふるえがとまらなかつたという。

僕は、羞恥と屈辱と吐きすてたいような憤りに息がつまりそうだった。それどころか、いまからでも飛んでいつて宮城を焼き

払ってやりたいと思った。あの塚の松に天皇をさかさにぶら下げて、僕らがかつて棍棒でやられたように、滅茶苦茶に殴ってやりたいと思った。いや、それでもおさまらない気持だった。できることなら、天皇をかつての海戦の場所に引っぱって行って、海底に引きずりおろして、そこに横たわっているはずの戦友の無残な死骸をその目に見せてやりたいと思った。これがあなたの命令ではじめられた戦争の結末です。こうして三百万ものあなたの「赤子」が、あなたのためだと思つて死んでいったのです。耳もとでそう叫んでやりたい気持だった。(4)

こうした呪詛の書き付けた後、渡辺清は「自己責任」について語りはじめる。これはまさに、「私」をピストルで自殺させた深沢七郎や、「川崎君」を頓死させた三島由紀夫と基本的には同じ理路をたどつたものだと考えてよいだろう。したがって、宮城を焼き払つて天皇を逆さ吊りにしたいと願つた渡辺清の情念を、あるいは復員兵や英霊たちの情念を文学的に形象化した小説が「風流夢譚」だったと考えるとよい。深沢七郎も三島由紀夫も、「砕かれた神”の夢を見たのだ。夢というものは、無意識下のコンプレックスが、抑圧に抵抗して浮上することによる変容を被りながら、自らの姿を意識に告げ知らせるものであると言うが、深沢七郎の「風流夢譚」はまさに敗戦後を生きる日本人の中に抑圧されたコンプレックスを、「浪漫的小品」(5)として仮構しつつ描き出したものであった。

註

(1) 谷内六郎のメルヘンチックなカットを付して掲載されている。また、同じ月の『中央公論』誌上に発表されていた文章の多くは、一九六〇年発表当時の政治的な課題を伝えている。こうした事柄を分析することも、「風流夢譚」がどのようなコンテクストで受容されたのかを考える上で興味深いところであるが、本稿では取り上げない。

(2) 事件の概要は、野依秀市「風流夢譚」の批判と国民への訴えー鳴中・中央公論・小森事件の根本」(芝園書房・一九六一年)や中村智子『風流夢譚』事件以後ー編集者の自分史』(田畑書店・一九七六年)、京谷秀夫『一九六一年冬』(晩声社・一九八二年)のちに『一九六一年冬「風流夢譚」事件』平凡社ライブラリー・一九九六年)などに詳しい。

(3) 不況下の「蟹工船」ブームで共産党の新規入党者が増え、年間一万人近くになっていることを、昨夏新聞各紙が伝えている。

(4) 『私の天皇観』(辺境社、一九八一年八月)。初出は、『思想の科学』第20号(一九六〇年八月)。

(5) 「風流夢譚」の末尾には「(三つの浪漫的小品よりーその一)」とあり、続編を構想していたことが知られている。

(のなか・じゅん)